

社会福祉法人京都社会事業財団 西陣病院

リニューアルした透析センターで、質の高い透析と医療福祉に力点を置く

1934年、大報恩寺(千本釈迦堂)の境内に西陣診療所として開設され、伝統の町、京都・西陣で、地域の福祉と医療を支え続ける西陣病院。2007年7月、ワンフロアー115床に集約された透析センターでは、5つのシフトを組み、活発なチーム医療を通して370人の透析患者さんに対応するとともに、患者さん全員の透析生活をMSWがサポートしています。透析センター長の今田直樹先生とスタッフのみなさんに現場の様子をうかがいました。

フットワークの良さが、チーム意識を高めていく

看護師長 佐伯昭子さん 看護師 栗野明子さん 臨床工学検査科科长 水野良彦さん 医療社会福祉課課長 山本みどりさん

患者さんのケアでご苦労されるのは、 どんな点でしょう?



佐伯 高齢の患者さんが増えていきますから、週3回の通院が高いハードルになっていることが一番の問題ですね。そして、もうひとつ気になるのが、一人暮らしの男性の患者さんです。家族の支援が少なく、食生活や水分などのコントロールが上手くいかない方が増えています。なかなか改善しない場合にはMSWと一緒に対応を考えていくようにしています。

栗野 患者さんへの対応で苦慮するのは、不満や不安があってもだまってためこんでしまう方の場合ですね。その方の興味のある話題をさぐりながら、時には私自身の個人的な話題も持



ち出して、できるだけコミュニケーションをはかるように心がけています。そうしているうちに、患者さんの気持ちが変わることがあるんです。例えば、私が産休明けで透析センターに戻った時に、私のお産のことや、皆さんのお孫さんのお話で雰囲気がなごんだ感じになって、とても嬉しかったですね。
山本 5人のMSWが、兼任の形で370人の患者さんを担当しています。私が着任してからもう30年になりますが、当初から関わった患者さんもいらいしゃいますし、一緒に年をとってきたという連帯感みたいな気持ちがありますね。

現在は高齢の患者さんが増えて、相談の内容も介護に絡むものが多くなりました。介護保険に関する相談、行政機関との調整、介護タクシー、住環境の改善などに細かく対応して、一人ひとりが最後まで自分らしい生活を送ることができるよう支援していきたいと日々駆け回っています。

水野 透析の余命は数年という時代から関わり、すでに30年が経ちますが、患者さんに学び、育てていただいたという思いがありますね。患者さんと接する時には、できるだけ目線を合わせてゆっくりとお話をうかがうようにしています。こちらから先に話を出してしまうと威圧的になる場合がありますから、若いスタッフにも、「待つて聴く」ことを伝えています。

スタッフ間の連携は、 どんなふう to ?

佐伯 大勢の患者さんがいらっしゃいますし、患者さん一人ひとり、抱えた問題は異なります。患者さんの状態や、生活面のことについての情報を極力一元化して、共有し、何か問題があればスタッフ間でカンファレンスを行い、解決するようにしています。そのためには、日々忙しい中で、透析看護自体がルーチン化しないように互いに刺激しあい、レベルアップしていけるような状況を作っていきたいと思います。

山本 透析は、徹底的にコントロールされた管理医療ですから、患者さんは強い拘束感の中に身を置くことになります。当然、そのことを受け入れていくことが困難な場合もあります。多忙な中、スタッフと廊下ですれ違った時など、「どうしよう?」って、お互いにつかまえて話していますね。

水野 みんな熱いですよ(笑)。スタッフ間のフットワークの良さは自慢できますね。医師からの治療の指示も、スムーズ



にスタッフ間で共有し、対応に移しますから。臨床工学技士としては、安全な透析は絶対条件ですが、検査値データの変化をいち早く医師や看護師に伝え、合併症の早期診断と治

社会福祉法人京都社会事業財団 西陣病院
京都府京都市上京区七本松通今出川上ル
<DATE> (2008年7月現在)
透析室スタッフ数:医師5名、看護師50名、臨床工学技士17名、
薬剤師1名、MSW5名、管理栄養士6名
透析ベッド数:123床(うち8床病棟)
透析患者数:367名
透析患者の年齢:平均68.8歳(2007年12月末)
原疾患分類:慢性糸球体腎炎41.1%、糖尿病性腎症36.5%、その他22.4%



療に積極的に関わっていかうとする姿勢も大切だと思っています。

山本 世の中の流れは、何でもマニュアル化の方向に向かっていますが、私たちの仕事は、一人ひとりの違いに焦点を当ててこそ、本当の支援になるとと思っています。そういう意味で、

患者さんの生活の場(地域)から教えられることは大きいですね。透析患者さんが表現されない影の部分、透析に



よるストレスにも目を向け、敏感に感じとっていきたいと思います。在宅では、透析室で見えなかったものが見えてきますから、他のスタッフにも声をかけ、一緒に在宅訪問に行こうと誘っているんです。

診療科の垣根を超えて、総合的な医療の提供を

泌尿器科部長 透析センター長 今田直樹先生

患者さんのケアについて、
ポイントにされているのは
どんな点でしょう?

今田 370人の透析患者さんのうち、入院されているのは約30人と割合としては少ない。高齢患者さんの送迎のコーディネートなど、ソーシャルワーカーの協力を得ながら、できるだけ通院をめざしています。場合によっては受け入れ病院にお願いすることもあります。基本的には当院で導入から終末期まで一貫して対応させていただくという方針です。

そのためには、スタッフがしっかりしていること。チーム医療が大事だと思います。もちろん治療方針については、医師が毅然とした態度で対応しなければいけないと思いますが、医師に伝えづらい思いを受けとめ、対応していくスタッフが患者さんを支えていくのだと思いますね。

透析医療において、
先生が大切にしていることは?

今田 医師として患者さんに対する時にいつも考えるのは、自分にとって大切な人、例えば自分の親ならどう対応するかということ。制限された生活の中でただ長生きしていただければいいのかと。透析は生きるためのひとつの手段ですが、長期透析患者さんの中には透析のために生きているような状態になっている方もいらっしゃいます。透析はオールマイティではなく、身体にも負担がかかることを導入時にご本人と家族の方に十分、お話しし、理解していただいた上で実施しています。現場の医師として、高齢者の透析導入、継続にどのように対応していくのか、すべての患者さんに透析が必要なのかどうか、今後ますます難しい選択を迫られる問題だと考えています。



糖尿病性腎症の方で導入後のコントロールの悪い方に対しては、透析をして生きることの意味について改めて話し合うこともあります。透析で得た人生や生活を大事にして下さいと。それはあなたの人生であって、決めるのはあなた自身であると。

合併症対策が求められる透析治療は、全体をコーディネートしていくことが鍵になりますから、他科との連携も欠かせません。当院は、診療科間の垣根が低く、それぞれの分野のエキスパートでありながら、お互いの信頼関係に基づいた連携ができています。そうしたフットワークのよさを生かした総合的な医療を行っていると思います。患者さんが「ここに世話になってよかった」と思えるような病院にしたいですね。